

研究ノート

看護学生の看護倫理の関心と その内容の実態調査

A Research on Nursing Student's Interests in Nursing Ethice and the contents

泉澤真紀

Maki IZUMISAWA

保健福祉学部保健看護学科

キーワード：看護倫理，看護教育，倫理的感受性，看護学生，基礎看護学実習

抄録（要約）

- 【目的】本研究の目的は、A 大学における看護学生の看護倫理の関心とその内容の実態を明らかにすることである。
- 【方法】1 年次開講である看護倫理の講義後、基礎看護学実習を経験した1，2 年生の看護学生124 人のうち、同意があり有効回答が得られた86 人を対象とした。2015 年3～5 月に自記式質問紙調査を用い、看護倫理に関する関心の有無、倫理観の必要性とその理由、講義や実習で捉えた看護倫理とその内容について実態を調査した。なお調査の任意性、秘密性、成績とは関連しないことを口頭・紙面をもって説明し同意をとる倫理的配慮を実施した。
- 【結果】対象者86 名のうち、約7 割が看護倫理に関心をもち、9 割の学生は倫理観が必要と答えていた。必要と考えた理由は、医療の進歩に伴う倫理性、生命の尊厳と人権、仲間同士の関係性、多様な価値観への視点、職業観であった。また看護学生は、講義で習った守秘義務やインフォームド・コンセントなどの内容を、実習場面体験することでより学びを深めていた。
- 【考察】1，2 年生の早い段階の学生であっても、看護倫理に関し講義や実習を通し高い関心を示し、看護者には倫理観が必要であるとしていた。1 年次に看護倫理を教授する難しさはあるものの、教育の早い段階で倫理教育に触れることは、専門職業人を教育していくうえで重要であるといえる。

I. 緒 言

看護という行為は、人の生老病死に立ち会う倫理的実践であるといわれている。看護実践そのものが倫理の上にあるといっても過言ではない。看護者は、現場に起こる倫理的側面をもつ現象に気づき、考えながら常に最良の判断を下し看護を実践していかなくてはならない。昨今看護学教育においても「21 世紀の看護学教育」（大学基準協会、平成14 年）の中に、看護職に期待される像として、「人間性豊かで暖かく生命に対して深い畏敬の念を持つ」とされており「看護倫理」が実践の基盤となることが示されている¹⁾。つまり、看

護倫理は看護教育の重要なコアであることは疑いない。

倫理的感性の素地を養うために、講義や演習、実習において学生との関わりは重要である。倫理は単に知識の伝達ではなく、事例や関わりの中で熟考し、答えを持たない問いを常に追いかけていなければならないからである。A 大学において平成24 年度の新カリキュラム改正で、看護倫理の授業は1 年次と4 年次の2 回に分けられた。その他倫理にかかわる授業としては、倫理学（1 年次・2 年次必修、各1 単位）、哲学的人間論（3 年次選択、2 単位）がある。多くの看護大学では、医療倫理や看護倫理の授業開講は、ある程度実習が進む3～4 年次であり、早くても2 年次という報告があ

る。その理由は、看護倫理の内容自体が実践に即しており、体験的熟考が必要であるため非常に難しい内容を含むためである。特に最初に行われる導入実習前に看護倫理の授業を開講している本大学は、全国でもあまり類をみない。本研究者の調査においても現時点において北海道内13校の看護系大学では唯一である。

看護の専門職として、いかに倫理観を持った学生を育てるかが課題になる中、早い段階で倫理について授業を開講しているA大学の学生の看護倫理の関心とその内容の実態について調査をした。

Ⅱ. 研究 方 法

1. 研究目的

本研究の目的は、A大学における基礎看護学を学ぶ段階の看護学生（以下、学生）の看護倫理の関心とその内容の実態を明らかにすることである。倫理的感性が重要になっている中、講義や実習で学生が倫理的内容に気づき関心を示している実態から、今後の看護教育への示唆をえる。

2. 研究対象者

「看護倫理Ⅰ」を受講し、「基礎看護学実習Ⅰ」及び「基礎看護学実習Ⅱ」を終了したA大学1、2年の学生124人

3. 調査期間

2015年3～5月。看護学生は「看護倫理Ⅰ」の受講後、1年生は「基礎看護学実習Ⅰ」の終了後に、2年生は「基礎看護学実習Ⅱ」終了後に横断的に調査した。

4. 研究デザイン

自記式質問紙調査法による実態調査研究。

5. データ収集方法

講義やクラスアワー後に配布し回収する集合法調査

6. 質問内容

質問紙は択一回答方式、順序付け方式及び自由記載方式を組み入れた。

- 1) 属性：性別、入学時の状況
- 2) 看護倫理の関心の有無、倫理観必要性の有無とその理由
- 3) 学生が捉えた看護倫理
 - (1) 講義「看護倫理Ⅰ」で印象の高い内容

内容についての分析は、8コマ講義の内容について、関心の高いもの上位3つを選択してもらった。順位の高い項目から3点、2点、1点を付与し全体の合計を点数化した。なお、回答数が2つのものは3点、2点を、回答数が1つのものは3点を付与した。無回答のものは0点とした。

- (2) 基礎看護学実習における倫理的気づきの有無とその内容
- (3) 看護学実習で印象に残る倫理的場面

6. 分析方法

調査変数は記述統計を用いた。また自由記載は、一意味一内容で示す文章で切ってコード化し、その文章を検討しながら意味内容を把握しながら、意味の解釈が妥当かどうかを確認しながらサブカテゴリー、カテゴリーへと質的帰納的に分析し、これまでの研究成果内容と対比しながら妥当性を検証した。

7. 学修内容及び進捗状況

- 1) 看護倫理Ⅰ…1年次後期に開講されている1単位15時間の講義で、看護倫理の基礎となる学習。インフォームド・コンセントや守秘義務、看護師の倫理綱領を学ぶ。
- 2) 基礎看護学実習Ⅰ…1年次後期に開講されている1単位45時間の実習。看護の導入実習である。既習の知識を活用し療養環境を観察し、受持ち患者を通してコミュニケーションを実践する。
- 3) 基礎看護学実習Ⅱ…2年次後期に開講されている2単位90時間の実習。基礎Ⅰ終了1年後に実施する。看護過程の展開をはじめて患者を通して実践する。
- 4) 基礎看護学実習…基礎看護学実習Ⅰと基礎看護学実習Ⅱの両方をいう。

8. 倫理的配慮

調査にあたっては、「看護倫理Ⅰ」及び1年生に対しては「基礎Ⅰ」、2年生に対しては「基礎Ⅱ」の成績がすべて発表され合格が確定した後に実施した。学生には、研究目的と方法及び意義、参加の任意性、自由回答、質問紙は無記入、調査は成績には関係しないことを口頭と書面をもって説明し、同意が得られた学生のみを対象とした。得られたデータは個人が特定されないよう配慮、情報の保護に努めることを説明した。また学会発表や論文掲載があることも加えた。

Ⅲ. 研究結果

1. 属性

調査対象者 124 人のうち同意が得られた 88 人（回収率 71.0%）のうち性別および入学時の状況の記載のない 2 人を除外した 86 人を対象とした（有効回答率 97.7%）。86 人の内訳は、1 年生 21 人（男性 2 人、女性 19 人）、2 年生 65 人（男性 15 人、女性 50 人）であった。また入学時の状況は、現役生が 72 人（83.7%）、それ以外が 14 人（16.3%）であった（表 1）。

2. 看護倫理への関心度及び倫理観の必要性

看護倫理に関心がある学生は、58 人（67.4%）、うち 1 年生は 16 人（76.2%）、2 年生は、42 人（64.6%）と減少していた（図 1）。また、看護師には倫理観が必要と回答した学生は 78 人（90.7%）、うち 1 年生では、19 人（90.5%）、2 年生では 59 人（90.8%）であった（図 2）。

看護師には倫理観が必要と回答した 78 人のうちその理由について、63 人から 72 項目の自由回答が得られた。その内容は、医療の進歩に伴う倫理性、生命の尊厳と人権、人間同士の関係性、多様な価値観への視点、職業観の 5 つの内容があげられていた（表 2）。

表 1 対象者の属性

		人数	(%)
対象者数		86	100
性別	男	17	19.8
	女	69	80.2
学年	1 年生	21	24.4
	2 年生	65	75.6
入学状況	現役生	72	83.7
	それ以外	14	16.3

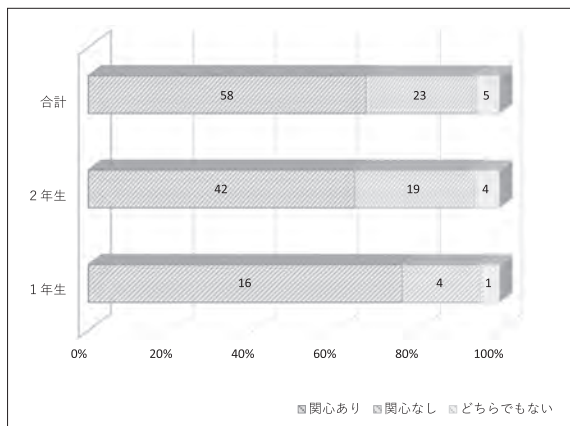


図 1 看護倫理に関心があるか

3. 学生が捉えた看護倫理

1) 講義「看護倫理 I」で印象の高い内容

授業で開講されている 8 コマの授業のうち関心一番の高い内容は、プライバシーの保護やインフォームド・コンセント、アドボカシーなどの重要な用語に関する内容、次に看護師の倫理綱領、生命倫理と医療倫理と続いた（図 3）。

2) 基礎看護学実習での倫理的気づき

基礎看護学実習で倫理的体験があったと答えた学生は 52 人（60.5%）、そのうち 1 年生は 15 人（71.4%）、2 年生は 37 人（56.9%）であった（図 4）。その内容で一番高かったのは、2 年生とも守秘義務であるが、1 年生では、学生の姿勢や態度、チーム医療であるのに対し、2 年生ではインフォームド・コンセント、インシデント・アクシデントであった（図 5）。学生の経験した基礎看護学実習における倫理的場面の具体的内容は、守秘義務に関すること、インシデント・アクシデントおよびインフォームド・コンセントなどであった（表 2）。

3) 基礎看護学実習で印象に残る倫理的場面

実習において、学生が印象に残っている倫理的気づきや体験は、守秘義務に関すること、インフォームド・コンセントに関すること、インシデント・アクシデントのことであった（表 3）。

Ⅳ. 考察

1. 看護倫理への関心や必要性について

A 大学では、1 年次後期に開講されている導入実習前に、看護倫理 I の授業を展開している。授業内容は講義の中で、グループディスカッションを 8 回の講義終了のち、初めての実習に臨む。そのため 1、2 年生

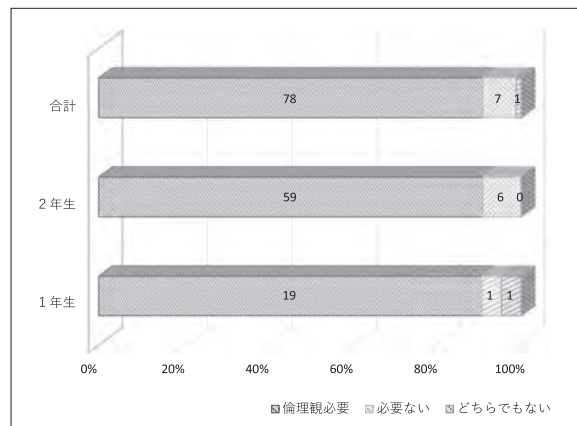


図 2 倫理観が必要か

表2 看護師には倫理観が必要だと考えた理由（自由回答の一例）

<p>1. 医療の進歩に伴う倫理性（5）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者にとって拘束が本当に良いものなのか ・医療が進歩している現代であるからこそ倫理観が必要だと思う
<p>2. 生命の尊厳と人権（20）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命にかかわる仕事だからこそ、倫理観が大切だと思う ・生と死に直面するから ・看護は人の根源の部分に一番にかかわることだから ・人の命と人生のかかわる仕事だから
<p>3. 人間同士の関係性（25）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人との関わりがある以上倫理的な視点がなければならない ・倫理観がないと社会的な問題が生じるから ・看護師は技術も必要だが心と心のやり取りが非常に重要だから ・患者さんを理解しようとする姿勢が大切だから
<p>4. 多様な価値観への視点（15）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人には個性があるから ・人間はものではなく、医師や価値一人ひとり考え方が異なり自尊心がある ・答えが一つではないことを学ぶため ・自分の行う援助が正しいのかわからなくなったとき倫理に頼ることができる
<p>5. 職業観（7）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療そのものが倫理的なことだから ・看護師に倫理感がなければ患者にひどい行いをする可能性があるから ・弱い立場におかれている人を支える職業なので差別があってはならない

（ ）内の数字は、回答の個数を示す

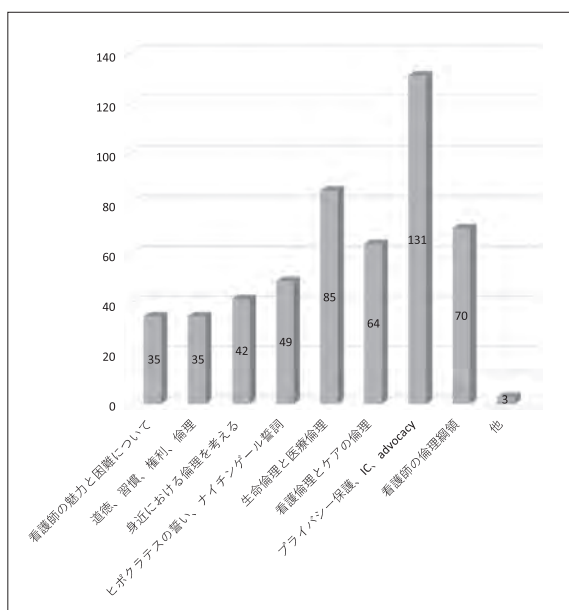


図3 看護倫理の授業で印象の高い内容

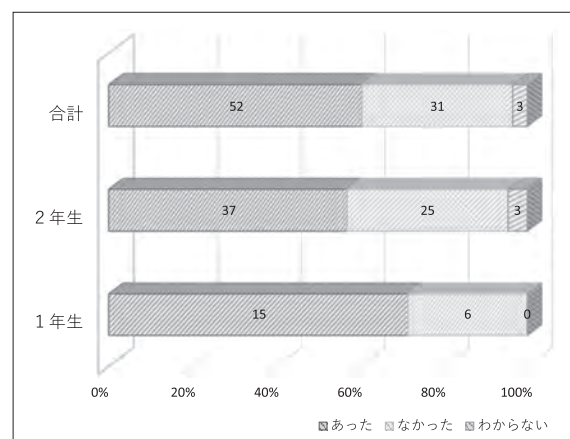


図4 基礎看護学実習における倫理的体験の有無

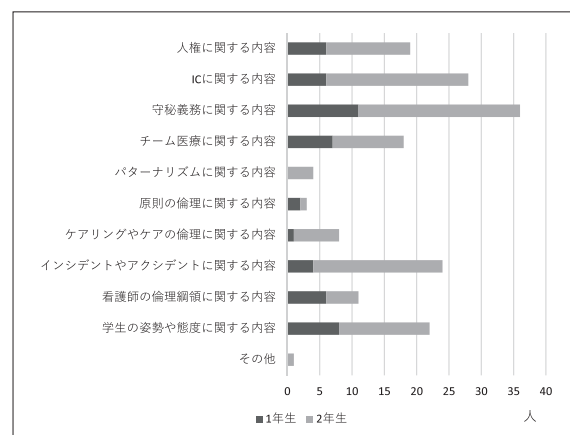


図5 基礎看護学実習における倫理的気づき

表3 基礎看護学実習で印象に残る倫理的な場面（自由回答）

守秘義務	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の情報が書いてある紙は、ナースステーション内だけで見ることができ、廊下に持ち出さないようにしていた ・守秘義務で、どこまで守り、伝え、秘密を知った時の対応 ・カーテンをすることによる清拭 ・実習での出来事を口外しない ・プライバシー。話し合いは、患者、家族、ナース、医師など小さな部屋で行っていた ・受け持たせていただくときの同意書に守秘義務があること ・実習発表会の終了後にも、実習記録物がそのままPCに残っている人がいた ・プライバシーです。
インフォームド コンセント	<ul style="list-style-type: none"> ・医療者はただ説明して終わりではなく、患者が理解し納得しなければインフォームド・コンセントとは言えないこと ・末期がんのインフォームドコンセントについて ・自己決定などです
インシデント アクシデント	<ul style="list-style-type: none"> ・朝礼で必ずインシデントについての話があった ・インシデントについて、臨床の看護師が報告書を書いているところをみた ・インシデントが実際の看護の現場で話し合われていて、その対処法も話し合われているところをみた
倫理的 ジレンマ	<ul style="list-style-type: none"> ・転倒リスクのある患者さんだったけど、身体拘束が行われていなかった ・ベッド柵も一か所のみだったこと ・医療的な面ではよくないこと、それは本人もわかって影響もわかっている ・学生はどのラインまで自己判断で動いていいのか
ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・前向きに考えていれば、患者もまえむきにかんがえてくれるようになる

の段階では、臨床の体験をごく少しし持ち合わせていないため、学生には看護倫理は受け入れにくいのではないかと考えていた。しかし、本研究において学生の倫理への関心は、約7割であり高いといえる。その理由としては、実習前に倫理とはどのようなことをいうのか、身近なところから事例を用いて考えさせること、また実習で遵守すべき守秘義務や個人情報の取り扱いの徹底が倫理につながることを、講義を踏まえ実習オリエンテーションの中でも繰り返し行っていることが考えられる。そして普段の何気ない言葉遣いや態度、振る舞いなども倫理であるということが、実習の実践を通して感じていることからもうかがわれる。このように、身近なところから倫理が存在していることに学生は気づく動機になっていると考える。

具体的な回答をみていくと、清拭時にカーテンを閉めてプライバシーを保護すること、実習記録の取り扱い方法、同意書を取る場面など、学生自身にもその責任があることが看護倫理であると気づいている。そのほか、実際に末期がんの患者の意思からの告知場面に遭遇したり、看護師がインシデントに携わりどう対処しているかをみたり、学生としての看護ケアへのジレンマを体験したりすることで、看護倫理への関心が高まっていると考えられる。このように、倫理を身近な実習の体験から結び付けていくことは重要であると考ええる。

一方、看護倫理への関心以上に看護師に倫理観は必

要だと答えた学生は9割に達していた。倫理に関心が今はないとしながらも、看護者に倫理観は必要であると多くの学生は考えていることがわかった。専門職業人としての自覚は芽生えを感じていると考えられる。しかしながら1割の者は、必要ないもしくはわからないと答えていた。その理由として、倫理という言葉の難解さとともに、身近に感じられずことが考えられる。看護者になる自覚と責任が芽生えていくのは、今後臨床実習を積み重ねていきで考え感じていくことが必要である。1, 2年生の時期は、これから看護師を自分の一生の仕事にするかどうか迷う時期でもあると考える。そして基礎看護学実習の段階では、自己の職業選択の正しさにまだ確証が持てない時期でもあるかもしれない。専門職としての基盤、すなわち看護の倫理を早い段階から教授し、看護の専門職業人として自覚をもつことができるような関わりが必要である。教員と学生との関わりの中で教員が看護を語る環境の中で、看護を一生の仕事として行ける自覚を育てる関わりに必要性があると考えられる。

2. 看護倫理の授業と実習の連動

山本ら²⁾の調査によると看護基礎教育における倫理教育は、導入前では看護学概論や基礎看護学の一部や実習前のオリエンテーションで行っているが大部分を占め、看護倫理学という授業を実習前に行っているのはわずか4.2% (72校中3校) という実態を明らかに

している。臨床経験が皆無に近いこの時期に、看護倫理という現実味乏しい内容をどれだけ学生に伝えられるかという問題も抱える。そのような理由から1年生の時期に看護倫理を教授することは難しい。特に倫理というものは、何かの知識を伝達したり、集団規範を強化するものでもない。教えられるものは礼儀作法や専門職としてのエチケットであり、倫理と混同してはいけない³⁾。看護倫理の内容をみても、臨床における様々な問題を思考するという点において、看護を学ぶ初段階の学生には難しい内容も多く含んでいる。特に授業ではどのように考えていくかという明確な回答がなく、学生はどこか腑に落ちない体験をしていることも考えられる。授業と実習と連動して、様々な工夫をしながら看護を考え創造する力を引き出す授業展開は重要であると考えられる。そう考えるとA大学での取り組みは、チャレンジ的な取り組みであるといえる。

看護倫理の授業において学生は、よく知られている重要なキーワード、例えば守秘義務やインフォームド・コンセント、アドボガシーといった内容が特に印象に残っていた。それは実習での経験と連動していることがわかった。調査が実習の後であったため経験したことが授業として残り記憶にとどまっていたことも考えられる。その中でも注目すべき点は、1、2年生の早い段階であっても、難しいとされる中でも倫理的ジレンマに気づく学生も存在していたことである。例えば身体拘束の場面、医療的側面で治療上の決定受け入れに関するノンコンプライアンスの問題も取り上げていた。このように医療の抱える倫理的な問題へも気づくことのできる学生もいたことがわかった。他方、無資格の学生の看護援助に対するジレンマも倫理的なことであると学生は感じていた。学生は、看護者としての法的責任を直接負うことはないが、学内で習ってきた知識や技術をどこまで駆使できるのかできないのか、できないのであればどのように対処すべきか、学齢の立場で悩んでいることも明らかになった。無資格の看護学生が、患者の同意と指導の下に看護援助はできるとされていても、教育側からみて実施レベルの判断は、学生の学習進度や能力、学生個人の特性や学習内容の状況、臨床側の都合や解釈によっても違いがある。また看護の対象である患者の状況によっても変わってくるため一概に判断がしにくい場面も往々にして存在している。教員と臨床、そして学生との中で、十分な連絡・報告・相談体制と学習支援のための環境調整も重要である。悩み、苦しみ、解決に至る道筋で、倫理的問題だと捉えられていることは、倫理的感性の

芽生えであると考えられる。

一方、倫理に関する関心や体験の頻度は、1年生より2年生の割合が減っていたことが示唆されていた。回答内容の時期は、1年生は授業が終了後まもなくの、2年生は授業から約1年経過してからの実習ということも考えられる。授業で聞いた内容が、即実習体験につながったが、授業内容は時間の経過とともに薄れていったことも考えられる。講義の終了をもって倫理が終わるのではなく、授業と実習を連動させながら、もしくは各教授方法や実習の中で倫理的感性の開花に働きかける必要性があると考えられる。

3. 看護学生として倫理観を持つことの重要性

学生は看護の基礎を中心に学び臨床実習の経験も少ない中、倫理観という言葉自体の理解もまだ確立できない時期であるが、その多くが倫理観を持つことは必要と回答していた。その理由をみると、現代の医療の進歩に関する問題の指摘や、専門職業人としてのあり方を自覚があることがわかった。具体的には、生命の尊厳と人権の尊重に携わる職業人として、医療の進歩がもたらすジレンマに対する態度として責任ある自覚、多様な価値観の重要性が問われる中、答えのない問いに立ち向かわなくてはならない勇気とその構え方などがあった。また倫理とは、「倫理が個人の道德規範でもあり、かつ人々が共に暮らす共同体における規範である」⁴⁾というところからも、人と人との関係性を問う重要性も理解していた。さらに倫理は職業観を反映するというところからも、看護が専門職としての職業を常に意識する必要性にも言及していた。

看護倫理を考える時、日本看護協会の『看護師の倫理綱領』(2003年)は重要である。本明文は、実践を行う看護者を対象とした行動指針であり、かつ看護実践について専門職として引き受ける社会的責任を示す社会との契約⁵⁾として、看護師としての価値観や倫理観がこの中に反映されている。一方看護学生であっても、これから看護職業人として育つ上において、看護する道筋を与えてくれることにおいて十分考慮していく必要性はあり、かのような看護者に育てていく我々の責務もある。そのために、看護学を学ぶ初期段階からの倫理教育は必要であると考えられる。しかしながらその内容がすぐに理解できるとも限らない。であるからこそ学生の早い時期に倫理綱領を含む看護倫理の考え方を伝え、4年間という時間をかけ「倫理観」という内発的動機をつくっていくことが必要である。幸いにも学生の早い時期に看護倫理を教授することで学生の

関心も高いことが考えられている。看護教育全般の中で陶冶されていくように、その後の講義や演習、実習においても意図的に倫理について考えていく機会をつくっていく必要があると考える。

テクノロジー時代の医療の進歩は、倫理学者レンクの述べるように「システムの非人間性と道徳的不十分の月並みさ」⁶⁾に陥る可能性を秘める。であるからこそ、我々は常に何が良いことなのか、正しいことなのかを、画一的に効率的に考えるのではなく、具体的事象に照らし合わせ考えていくことをやめてはいけない。看護が専門職となり社会から信頼のおける職業となるためにも倫理が必要であることが、学生たちの自由回答の中にも表れていた。このように学生の倫理的感性は、看護を学ぶ早い段階においても十分育つ素地が備わっているといえる。

なお本研究の限界は、A大学の特殊性を示した一資料である。そのため一般を反映しているものではない。今後対象者を増やし検討していく必要がある。本研究は日本看護研究学会第41回学術集会で発表したものに加筆修正を加えた。ご協力いただいたA大学学生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 日本看護系大学協議会広報・出版委員会編：看護教育Ⅱ 磨く・育てる・動かす，日本看護協会出版会，p83，2005.
- 2) 山本真弓，鷺尾昌一，入部久子：看護基礎教育における倫理教育の実態調査，日本看護倫理学会誌，7 (1)，2015.
- 3) サラ T. フライ，メガン・ジェーン・ジョンストン：看護実践の倫理（第3版）（片田範子，山本あい子訳，日本看護協会出版会，p19，2010.
- 4) 鶴若真理，麻原きよみ：ナラティブでみる看護倫理－6つのケースで感じる力を育む，南江堂，p3，2013.
- 5) 手島恵監修：看護者の基本的責務 2016 年度版－定義・概念／基本法／倫理，日本看護協会出版会，p62，2016.
- 6) H. レンク：テクノシステム時代の人間の責任と良心（山本達，盛永審一郎訳），東信堂，2003.
- 7) 今井奈紗，福録恵子，中西唯公他，5年間を通じた段階的・継続的看護倫理教育の展開－三重大学医学部看護学科における倫理教育の紹介，三重看護学誌，16，pp61-65，2014.
- 8) 伊藤明子：看護倫理教育のあり方と課題，畿央大学紀要，11 (1)，pp1-7，2014.
- 9) 遠藤由美子：教育側に焦点を当てた看護倫理教育に関する研究の動向と課題，医療保健学研究，3，pp125-135，2012.
- 10) 倉林しのぶ，李孟蓉，尾崎貴代美他：臨床看護師の「看護倫理にかかわる知識の有無」と「倫理的問題の認識」との関連，日本看護倫理学会誌，5 (1)，pp34-39，2013.